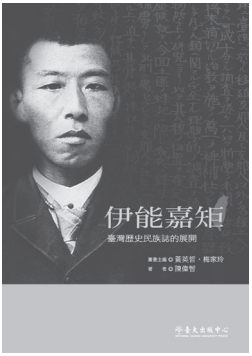
陳偉智著

伊能嘉矩――台湾歴史民族誌的展開

「台湾研究先行者」叢書 第1巻（黄英哲・梅家玲主編）

国立台湾大学出版中心／2014年9月／312頁／NTD 350元



笠原政治

明治期から大正期にかけて歴史学・人類学の台湾研究に大きな足跡を残した伊能嘉矩（一八六七―一九二五）は、日本の国内よりも台湾においてずっと知名度が高い。一例を挙げると、台湾の公共電視（テレビ局）が二〇〇〇年から放映した「台湾百年人物誌」シリーズには三人の日本人が取り上げられたが、それらは民政長官の後藤新平と烏山頭ダムの建設で知られる八田與一、そしてもう一人がこの伊能であった。

本書は伊能嘉矩の台湾研究について、その知識基盤、著述、影響と評価などを多角的に論じた労作である。文献の博捜に基づく考察は全体に密度が濃く、読んでいて思わず頷いてしまうような箇所の多い好著といえる。

著者の陳偉智氏は台湾近代史を専門とする中堅の歴史学研究者で、日本語の文献にも精通している。伊能の研究にはすでに大学院生の頃から取り組んでいた。一九九八年に台北の国立台湾大学図書館で特別展「伊能嘉矩と台湾研究」が開催されたとき、その企画を支えた若手研究

者の一人が陳氏であった。

伊能の著作は数が多い。台湾関係だけでも一五冊を超える単行本を執筆・編集した上、生涯にわたって各種の雑誌や新聞に、論文、資料報告、記事などを飽くことなく投稿し続けた。伊能と同郷の荻野馨がまとめた書誌を見れば、その健筆ぶりにはだれしも舌を巻かざるをえないであろう（『伊能嘉矩――年譜・資料・書誌』遠野物語研究所、一九九八年）。勤勉かつ筆まめな人物であったことが理解されるのである。陳氏は、そうした膨大な伊能の著作に目配りをしつつ、さらに未公表の手稿や中文の翻訳なども資料にした。それらの中には今まで日本の研究者に知られていなかった文献も含まれている。ただし、本書が扱ったのは伊能の台湾研究だけである。郷里の岩手県遠野を中心にした地方史研究や、教育関係の論説などは考察の対象にされていない。

本書の章構成は以下の通りである（各章の副題は省略）。

序
第一章　遠野と台湾
第二章　重層的な知識のネットワーク
第三章　族群分類知識の形成
第四章　歴史知識の構成
第五章　方法・フィールド・理論
第六章　影響と再生
結論

評者はこれまで人類学の立場から伊能の台湾原住民研究に関心を寄せてきた。台湾史の研究については十分な知識を有するわけではなく、本書の書評をするにはいささか心許無いのであるが、ここでは知識の及ぶ範囲で著者の記述をたどり、評者の関心に引きつけていくつかの点に私見を付け加えたい。

まず第一章には、略伝に沿った伊能嘉矩の学問的軌跡が記されている。明治維新の直前に奥州の遠野で生まれたこの人物は、少年時代に漢学の素養を身につけ、成人後には東京に出て近代歴史学と坪井正五郎を創始者とする人類学の知識を習得した。日本が台湾を領有したのは明治二八年（一八九五）である。伊能は志願して渡台し、それからおよそ十年間、総督府に下級官吏として在職しながら台湾研究に没頭する日々を過ごした。本書全体を通して最も多くの紙幅を充てているのがその期間の動向であることはいうまでもない。台湾から遠野に帰った伊能は、郷土研究と並行して台湾研究の完成にも力を注ぎ、大正一四年（一九二五）に五九歳で世を去った。生涯を通じて研究の専門職に就くことなく、自身の関心に忠実な研究を息長く持続した一知識人の姿が思い浮かべられるであろう。

第二章は、渡台後の伊能が研究活動を立ち上げていった経緯に焦点を合わせている。台湾原住民との最初の接触、同時期にやはり現地調査に従事した田代安定と鳥居龍蔵、台湾人類学会の発足などの点に着目して著者がこの章で明らかにしようとしたのは、伊能が抱懐していた「台湾人類学」の構想である。

それらの中で、著者が仮規則の全文（四八頁）などを掲げて詳述した台湾人

類学会についてはいくらか補足的な説明が必要と思われる。たしかに同学会は東京人類学会を中心にした知識のネットワークに位置づけられ、植民地におけるサテライト（衛星となる研究拠点）という趣旨で創設された。著者が指摘する通りである。しかし、実際には伊能一人が「台湾通信」などの形で『東京人類学会雑誌』に次々と原稿を送ったのにとどまり、学会自体の活動はわずか数回の例会を催したという程度にすぎなかった。共同の発起人であった田代でさえ、東京人類学会の機関誌に論文や調査報告をほとんど投稿しなかったのである。台湾人類学会の設立は伊能の研究構想を示す一つの機会ではあったが、設立された学会は研究団体としての実質を欠いていたといわなければならない。

次に進む前に、ここで本書の副題にある「歴史民族誌」という語に触れておく方がよいであろう。それは、ある集団の過去における状態を復元した記述的研究の意味ではない。著者によれば、伊能にとって現在に目を向ける民族誌（自身の言葉では「土俗」ないしは「土俗学」）と過去に遡る歴史とは明確に分離することができず、いわば連続した線の両極に位置するものと認識されており、そうした知識の形式を特徴づけるにはこの「歴史民族誌」が最も相応しいという（七―八頁）。伊能の学問形成や関心の所在、そして書かれた著作の内容などを考えた場合、実に巧みな命名と評せるであろう。自著の書名に、例えば『台湾志』（一九〇二年）、『台湾蕃政志』（一九〇四年）のように好んで「志」の字を使ったことも、そうした文脈で理解できるかもしれない。第三章と第四章はその歴史民族誌の中身について論じた本書の中心部分である。

第三章では台湾原住民の分類という問題が取り上げられている。この問題に関する伊能の所説としては、半年余りにわたる台湾全島調査の成果報告書『台湾蕃人事情』（一九〇〇年）に示された八種族分類がよく知られているが、もう一つ見逃せないのは、同書の所説に至るまでの期間に伊能が台北一帯や宜蘭の「平埔蕃」調査、清代までの文献資料に基づいて自身の新しい分類を模索していったプロセスである。著者の陳氏は「台湾通信」など一連の論考を丹念に読み込んで、その模索段階における伊能の思考回路を詳しく跡付けた。大いに興味深い考察であり、原住民族の分類問題に関心を持つ研究者には必読の箇所といえる。

伊能は前代までの「生蕃・熟蕃」という分類に替えて、実地調査による科学的な分類を打ち立てようとした。とくに注目したのは「平埔蕃」（現在の平埔族に概ね対応する）と呼ばれる人々である。その「平埔蕃」は必ずしも「熟蕃」とイコールではない。伊能は、山地を中心に居住する「種族」の中に平地附近で一部が「熟蕃」化している場合もあると考えた。「生蕃・熟蕃」と「種族」とでは分類の基準が違うのである。しかし、その「種族」分類については大きな疑問が残る。『台湾蕃人事情』で伊能は台湾全島の「平埔蕃」（同書では「ペイポ族」と呼んでいる）を一つの「種族」と見なした。つまり、台湾北端のケタガラン（凱

達格蘭族）から南端のマカタオ（馬卡道族）までを同じ「種族」と括った上で、内部を十の「小群」に分けたのである。では、そのような「種族」の分類は何か明確な根拠に基づいてなされたのだろうか。本書には明示されていないが、その点に関して陳氏はどのような見解をお持ちであろうか。

次の第四章で検討されているのは台湾史の研究である。漢文文献を自在に読みこなす伊能が最も多くの著作をものしたのはこの方面といってよい（本書巻末の単行本目録（二六一頁））。これまで伊能の台湾研究については、はじめに人類学の原住民調査を手掛け、次第に歴史研究へと傾斜していった、という理解が示されてきた。評者もまたそのように考えていた一人である。それに対して陳氏は、最初の歴史書『世界ニ於ケル台湾ノ位置』（一八九九年）が渡台後わずか四年後に出版されたことなどを挙げて、人類学研究と歴史研究は同時進行していたと指摘している（一〇七頁）。これは正鵠を射た見解というべきであろう。ただし、没後に出版された大著『台湾文化志』（全三巻、一九二八年）に至るまで歴史研究の方がほぼ一貫して継続されたのとは対照的に、遠野に帰郷した後の伊能が人類学や原住民研究への関心を徐々に失っていったことは間違いないように思われる。

それに続く第五章には、伊能の台湾研究が生み出されていった過程や、研究成果とその政治性をめぐる考察が示されている。著者の議論を十分正確に理解することは評者の手に余るが、この章から読み取れるのは、台湾統治の最初期に行われた原住民調査の時代性、当時の進化主義を土台にした文化発展理論と植民地イデオロギーとの親和性などの問題である。伊能は研究による住民「治教」への貢献を言明して新領土に渡った。そして、下級官吏という身分ではあったが、台湾総督府の支えで各地の実地調査を行い、また官製の研究団体などでもブレーン（研究の専門家）として重用された。植民地統治との結びつきをあまり強調しすぎると伊能の学究としての功績を歪めかねないにしても、台湾在住期にこの人物が総督府の統治体制に寄り添いつつ研究を進めたことは見落とせない。陳氏の考察は、伊能の台湾研究におけるそうした一面にあらためて目を向けさせてくれる。

伊能とその著作が今日までどれだけ注目されてきたのかを克明に追った第六章は、著者の資料収集力が存分に発揮された内容といえる。評者がこの章を読んで認識を新たにしたのは、とくに台湾における動きである。例えば、第二次大戦後の台湾で伊能の著作は『台湾文化志』、原住民関係の論考をはじめとして次々に翻訳され復刻されてきた（本書巻末の翻訳・復刻一覧、二六二―二七一頁）。今までに評者が把握できていたのは、それらのうちの一部でしかない。また、台南の国立台湾歴史博物館に展示されている伊能の全身塑像（本書巻頭の写真、二〇頁）は数年前に同館で実見したが、伊能が漫画の中にまで登場していたとは思いもよらなかった（一九四頁）。台湾では学術研究の世界にとどまらず、著者のい

う「公共歴史」にもその名が広く浸透しているものと考えられるであろう。

著者は伊能の台湾研究を総称して「歴史民族誌」と呼んだ。本書が焦点を合わせているのはその歴史民族誌の知識という点である。そして、さまざまな知識形式の生成と展開を丁寧に跡付けることによって、著者は伊能の伝記や著書・論文の影響などまで含めた大きな見取図をここに示したといってよい。

周知のように、台湾では一九八〇～九〇年代の民主化に伴って台湾研究の気運が高まった。その気運の中で研究生活を始めた陳氏は、台湾研究の先駆者である伊能に熱い視線を注ぎ、長年の研究成果を本書として上梓した。伊能という日本人に関する本格的な研究が台湾においてなされたのである。

日本では伊能の台湾研究というと、これまで原住民研究だけを取り上げるのが主流だった。『台湾文化志』のような歴史書まで視野に入れた研究が日本の学界でいったいどれだけ進んでいるのか、何とも心細い状態といわざるをえない。そのことは本書の参考書目欄を見ても一目瞭然である。

陳偉智氏の研究は全体として完成度が高い。これから日本でも新しい伊能嘉矩研究が行われていくならば、本書はそのための良い道標になることであろう。